

高品質なインターネットへ向けて

「情報漏洩」、「不正アクセス」、「マルウェア」。セキュリティインシデントに関連するニュースを聞かない日はありません。最近では、データを人質として金銭を要求するランサムウェアまで登場してきています。今年の2月には、ロサンゼルス某病院のPCがランサムウェアに感染し業務を遂行できなくなるという事件が発生しています。本案件では、最終的に身代金を払うこととなったと聞いています。こうした話を聞くたびに、我々技術者が問題を解決できないかと考えるのですが、技術だけでは問題は解決しないというように考えるようになりました。さまざまな案件を分析するたびに、もっとも脆弱な部分は「人」であることがわかるからです。つまり「人」が変わらないといつまでもこうしたインシデントはなくなるということなのです。

ではどう変わればいいのでしょうか？

大切なことは、「インターネットのセキュリティに関連して、関係の無い人は居ない」という意識を持つことではないかと思えます。組織にセキュリティ部門を設置したから大丈夫、CIOを選任したから大丈夫、誰かに任せておけば大丈夫なのではなく、自分自身もセキュリティに関して「当事者」であるということ意識することが大切です。システムの構造や難しいインシデントの仕組みを理解する必然性はないと思えます。しかし、自分自身の普段の振る舞いがセキュリティに関係しているという理解をただで、状況は大きく変わると思えます。すべての人が常に気をつけているだけで、「何かおかしい」ことに気づくことができます。気づくことができれば、あとは専門家が分析することで何が起きているのかを把握できるでしょう。

つまりすべての人々の意識を高めるための活動が必要になってきます。これは「教育」だと考えています。専門家の育成も不可欠ですが、それだけでなくすべての人々の教育をしていくこと、それが今必要なことだと思っています。インターネットのセキュリティを向上させることは、我々が社会基盤として使っているインターネットの品質を向上させることに他なりません。これを実現するために、技術の開発、社会制度の整備といったことが必要ですが、この教育を並行して行うことでより高い品質のインターネットにすることができるのではないかと考えています。

2020年には日本でオリンピック・パラリンピックが開催されます。その時には、インターネットはより重要な社会基盤となっていると思えます。その時に、日本がインターネットの品質向上をリードするために、技術・制度・教育の3つの観点で活動を進めていかないとはいえないと思えます。



砂原 秀樹

慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科教授／
先導研究センター
サイバーセキュリティ研究センター
センター長

1960年兵庫県生まれ。1988年慶應義塾大学理工学部博士課程修了。電気通信大学情報工学科助手、1994年奈良先端科学技術大学院大学情報科学センター助教授を経て、2001年から教授。2005年情報科学研究科教授。2008年4月より現職。

村井純氏（慶應義塾大学環境情報学部教授）らとともに、1984年からJUNET、1988年からWIDEプロジェクトを通じて、日本におけるインターネットの構築とその研究に従事。2005年より東京大学江崎浩教授と共にインターネットを通じて環境情報を共有するLive E! Projectを開始。現在は、パーソナル情報を安心・安全に活用するためのフレームワーク「情報銀行」プロジェクトを遂行中。